「私」にとっての福島原発事故を表現すること

語り・聞くではない表現を求めた
「こども」「若者」への聞きとりから

2024年11月4日

同志社大学都市共生研究センター（MICCS）
研究員
佐久川恵美

1.　はじめに

- 自己紹介
  沖縄県那覇市出身、京都の大学入学時に福島原発事故が発生
  →戦争や基地だけでなく、原発事故の暴力にもさらされているという衝撃
  →生活史の視点から原発事故を考える

- 目的
  福島原発事故によって被っている被害や痛みが一人ひとり異なる中で、事故発生当時「こども」や「若者」とよばれた人たちが自分の想いをどのように表現しようとしてきたか出版物や聞きとりをもとに考える

- 報告の流れ
  - 福島原発事故を「私」から考える
  - 「こども」「若者」である（であった）「私」が原発事故を表現すること
  - Xさんにとっての小説

2.1　福島原発事故を「私」から考える

- **福島原発事故の特異性の一つ：被害は一人ひとり異なるだけでなく時間が経つにつれて被害が累積する**（山川・瀬戸編2018）

  避難指示区域内外、被ばくの考え方、事故発生時の年齢、性別、障害…

  放射能汚染が解決しないなかで賠償の問題、被害者への誹謗中傷、核廃棄物の最終処分場…

- **生活空間に放射性物質が拡散したことで「安全」の基準が崩壊**

  どこまで被ばく防護するかは個々人の問題に

- **「正解」が分からない不確実な状況で「不条理な選択」が迫られることで葛藤、戸惑い、〈ゆらぎ〉が発生**（廣本2016）

  →健康影響、家族や友人関係、経済状況などを考えて「とりあえず」「いまのところ」の判断を重ねる

  「はっきり決断するのをためらわせる」（山下他2016：34）

  「どうしてこんなになったのか」（青木2021：79）

  →過去に行った「とりあえず」の判断が、現在や未来を問うものになる

2.2　福島原発事故を「私」から考える

自分と異なる選択をした人の存在が自分の迷いを深め、わずかな違いにも敏感に反応してしまう緊張感が続く（藤川2022：4）

「代弁できない」「分かったように勝手に話さないで」「自分の想いしか言えないし、それも言い切れるものではない」

「復興」のなかでICRP勧告などを根拠に「正しい」「ホント」の知識を構築

「放射線を正しく恐れる」（日本学術会議2011）、「放射線のホント」（復興庁2018）

→「正しい」「ホント」の知識で、人や言論を管理

→事故の被害や避難について語りにくくする排除の構造構築

「とりあえず」の判断を重ねるしかないなかで生じる〈ゆらぎ〉をなかったことにする「正しさ」「ホント」

被害の違い・被害の累積性を見えなくさせる「正しさ」「ホント」

「正しさ」「ホント」で自分（たち）の考えや状況を説明させない

個々人がおかれている状況や被っている被害や痛みを分かったように説明させない

2.3　福島原発事故を「私」から考える

〈ゆらぎ〉・見通しのたたない時間・代弁できなさを論点に据えて、一人ひとり異なる「私」の痛み・想い・状況を考える

石原真衣2020『〈沈黙〉の自伝的民族史』北海道大学出版会

- どれだけ訴えても存在を認識されず、時には誤解され誤解を訴えても聞いてもらえない、社会構造にアクセスできない存在として「私」を設定し、「私」を透明人間化する社会構造を明らかに
- 「私」の痛み・語り・存在が一方的に理解しやすい物語に変換されることで、差異が軽視され、「私」の痛みを語るスペースが消失

↓

違いやズレがあるそれぞれの「私」が感じてきた「痛みについて言葉を紡ぐ場」が必要

誰かにとって都合のいい「私」にならない、

「私」を透明人間にしない、「私」を思考する場

3.1 「こども」「若者」である（であった）「私」が原発事故を表現すること

新型コロナ感染拡大前後～「最近、事故について若者が声をあげ始めている」

事故発生から約10年（小学生→大学生、高校生→社会人）

オンラインミーティングの広がり、家に居ながら公の場で発信

Q：この時期から「若者」は声をあげるようになったのか？

事故発生時から家庭、学校、地域で声を発していたのでは？

言葉にできない部分があったとしても様々な表現を模索してきてたのでは？

平田、金、辻内2022「分断と対立を乗り越えるために―当時小学生だった若者たちとの対話から」

こどもたちは決して無力で受動的な存在ではない。親の考えや状況を察し、親を安心させようと不安定な家族を支えていた子供たちが少なからずいた（平田ら2022：378）

3.2 「こども」「若者」である（であった）「私」が原発事故を表現すること

わかな2021『わかな十五歳中学生の瞳に映った３・１１』ミツイパブリッシング

- 震災の混乱でこどもを気にかける余裕がなく**「何が正しいか大人も判断できない」ことへの気づき**（pp.30-35）
- **「こわい」「いやだ」と言えば周りの大人を困らせてしまうという想いから、自分の意見も感情も誰にも話せず沈黙**（p.43）
- 「誰も私の気持ちを分かってくれない」と孤立し、**生きる方法を探すなかでSNSで匿名で発信**。福島の経験や体調をつぶやくと心身を気遣うメッセージが届き心の支え、安心に（pp.86-89）

- 「こわい」と思っても周囲を困らせないために沈黙し孤立し、生きる方法を探すために掴んだのが、SNS上で匿名で自分の体調、経験や想いを表現すること
- 被ばくへの不安を語ること自体が差別的で復興を阻害していると意味づける「被害者の加害者化」（清水2022）が進行する状況で、匿名性を確保することが安心して話せる要素の一つに
- **匿名性をある程度担保しているSNS、本が「私」が感じてきた「痛みについて言葉を紡ぐ場」に**

4.1　Xさんにとっての小説

Xさん

震災発生時１８歳
避難指示区域外から県外に家族と避難
現在も福島県と県外の避難先を往復

（2024年10月21日オンラインで1対1で聞きとり）

Q：事故について周りの人と話してこれた？

A：事故発生当時、自分の想いを訴えても周りの大人たちにはきいてもらえなかった。友達と原発事故について話そうにも、どう話したらいいか分からない。台風や地震の被害があった時には少し（震災や原発事故の話が）できるけど、14年近く経って結婚や子育てで忙しくて話せそうにない。

周りに訴えても聞いてもらえないから（自分の想いを表現できる）他の方法を探した。

歌も絵も上手くない、Vtuberにもなれない、自己満だとしても自分の想いを表現するのは小説しかなかった

4.2 Xさんにとっての小説

Xさんが書いた小説

- 浜通りの架空の町で過ごす家族、動物、地域の人たちの原発事故前の暮らしと、事故によって暮らしや地域の風景・文化、動物との関係、それぞれの夢などが変化する姿を描いた
- 自分の体験や想いだけでなく、福島県から避難している人や福島県に住んでいる人、周囲の人たちにインタビューした内容も織り交ぜた
- **生きた証を残したかった**

- ➢ 何気ない日常の風景や、家族や幼馴染との会話、動物たちと触れ合う様子を緻密に描写
- ➢ 事故が発生してから一人ひとりの選択が異なること、大事にしていたものが事故によって変化することをも描写
- ➢ Xさん一人の物語じゃない、複数の人たちや動植物が生きてきた物語
- ➢ 小説を書くことをとおして複数の「私」が感じてきた「痛みについて言葉を紡ぐ場」をつくろうとしたのでは

4.3 Xさんにとっての小説

岡真理2000『思考のフロンティア　記憶/物語』岩波書店

記憶を語るという営為は、（略）聞き手［書き手］と語り手［読み手］が共同で作り上げていくもので、他者に呼びかける声も含まれている

- **原発事故で「語る」「きく」が不十分な状況に追い込まれ沈黙させられるなかで異なる表現方法を模索することは、自分や周りに起こっていることを表現するだけにとどまらない**
- **「消えてしまいたかった」（Xさん）と思わされる状況で小説を書くことは、複数の「私」が「生きた証」を受け取る読み手に呼びかけ、つながろうとすることでもあるのでは**
- とはいえ、痛みや被害を分かったかのように理解して終われば、一人ひとりの違いやズレを見落とす。誤解やズレ、言葉の間に沈黙があることを問い続ける必要

➢どれだけ周囲の人たちの想いを聞こうとしてきたか

➢表現されていること・されていないことを分かったかのように一つの大きな物語に回収せずにいられるかが問われ続けている

聞きとり・参考文献等

【聞きとり】

Xさん：2024年10月21日オンライン1対1で聞きとり

【参考文献】

- 青木美希2021『いないことにされる私たち　福島第一原発事故10年目の「いってはいけない真実」』朝日新聞出版
- 石原真衣2020『〈沈黙〉の自伝的民族誌―サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会
- 岡真理2000『思考のフロンティア　記憶/物語』岩波書店
- 清水奈名子2022「避難生活の苦渋と自己責任化をめぐる問題」髙橋若菜編『奪われたくらし―原発被害の検証と共感共苦』日本経済評論社113-135
- 平田修三、金智慧、辻内琢也2022「分断と対立を乗り越えるために―当時小学生だった若者たちとの対話から」辻内琢也・トムギル編『福島原発事故被災者　苦難と希望の人類学』明石書店
- 廣本由香2016「福島原発事故をめぐる自主避難緒〈ゆらぎ〉」『社会学概論』67（3）267-284）
- 藤川賢2022「累積する課題の解決に向けて―福島原発事故被害の10年を通して」『奪われたくらし―原発被害の検証と共感協苦』日本経済評論社1-23
- 山川充夫・瀬戸真之編『福島復興学』八朔社
- 山下祐介・市村高志・佐藤彰彦2016『人間なき復興　原発避難と国民の「不理解」をめぐって』ちくま文庫
- わかな2021『わかな十五歳中学生の瞳に映った３・１１』ミツイパブリッシング

【インターネット】

- 日本学術会議2011「日本学術会議緊急講演会　放射線を正しく恐れる」 chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.scj.go.jp/ja/event/pdf/126-s-3-1.pdf（2024.11.3閲覧）
- 復興庁「放射線のホント」chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.fukko-pr.reconstruction.go.jp/2017/senryaku/pdf/0313houshasen_no_honto.pdf（2024.11.3閲覧）